

第13回「国際博物館の日」記念  
第182回くらしの植物苑観察会 2014年5月24日(土)

## 里山の植物利用 -食べ物-

島立 理子(千葉県立中央博物館 主任上席研究員)

今日は房総丘陵を例に、里山に住む人々が、植物をどのように育て、利用(食べている)してきたかを紹介します。

### 人が管理する林と植物

里山の食べられる植物というとワラビ、タケノコ、キノコなどを思い浮かべるでしょうか。それらは季節になると「山」に生える植物です。「山」は奥山ではなく、畑や田んぼなどのまわり、ちょっとした森や林、里山林の事です。

里山林は常に管理されていました。具体的には落ち葉や落ち枝が取り除かれ、有機物が少ない状態になっています。実は、マツタケをはじめとした松と仲良しのキノコたちは、栄養の少ない環境を好みます。「自然に」生えているように見えるキノコも、実は人の手が加わった環境の中で生えてきているのです。

### 栽培と非栽培の曖昧な境界

最近房総の丘陵部ではシカやイノシシ、サルの被害に悩まされています。田んぼや畑だけでなく、タケノコなどの山菜も食べてしまうのです。そのため、ケモノから山菜を守るために、家の近くに移植して柵で囲う事もあります。また、歳をとって山まで行くのが大変だとの事で、家のまわりに移植するという事もあります。

房総丘陵では、お盆に迎えた祖霊に供える食物の献立の中に、「ヒョウのよごし」というものがあります。ヒユという葉菜で、1800年代までは野菜として広く栽培されていました。このヒョウは、種子はとらずに、畑に落ちたタネが翌年芽を出すのを待ちます。それを数本残しておいて、利用するのです。オノロバエ、オノレバエと呼びます。他にも、菜の花をはじめとしたアブラナの仲間の栽培も同様の行うことがあるといます。

これらの例は、完全な野生でも完全な栽培でもない育て方の例です。



畑の隅に生えているヒョウ

シンノミ畑

房総でシンノミバタケという言葉があります。シンノミとは汁の実の事です。自家用のための小さな畑の事です。先のヒョウはこのシンノミバタケの片隅に生えます。シンノミ畑には何種類もの作物を少しずつ植えます。同じ作物でも時期をずらして何回も種子をまき常に収穫できるようにします。

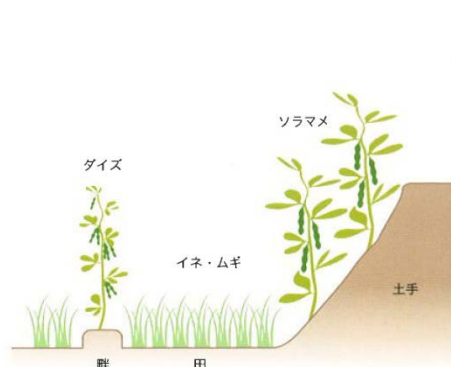
少し前まで、これらの種子は「自家採種」でした。自家採種された種子は、その土地の風土にあったものになると言われています。自家採種される事で、作物の多様性が保たれていくのです。

シンノミ畑には、里山林の落ち葉で作った堆肥が肥料として使われました。

畑の景観

そろそろソラマメの旬ですが、シンノミ畑ではソラマメを畑の真ん中ではなく、畑の片隅や田んぼの土手に植えられているのを見かけます。ソラマメは日光を好み、なおかつ乾燥もいけません。田んぼの土手は適地なのです。ちなみに、房総丘陵で田んぼの土手に植えるソラマメの事をドテッコと呼びます。土地の有効活用です。

また、たとえばラッカセイをまくときに、途中でゴマの種子を落とします。ラッカセイは地中で成長し、ゴマは細長く上の方で成長します。1つの畝の中で垂



田んぼ周辺の土地利用

直方向の空間利用をします。畦や土手の利用、1つの畝に数種類の作物を植えるなど、様々な工夫をしています。その景観は実に複雑です。

1年間楽しむ

あるおばあちゃんが「春になって植物が育ちはじめると、今年も1年楽しませてもらうと思います」と言っていました。里山林、シンノミ畑、土手、庭など身の回りに育つ(育てる)植物(食べ物)を収穫し、保存し、調理し、1年間のお茶請けにするのです。

「里山の管理」「栽培と野生」「作物の多様性」「自然をたくみに利用」「自然と共生」など難しい言葉を使いがちですが、「1年間楽しむ」という言葉には重みがあります。

.....

**次回予告** 第183回くらしの植物苑観察会 2014年6月28日(土)  
 「梅雨を彩る華花」 辻 誠一郎(東京大学大学院 教授)  
 13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要